みよし地方史

第125号
2024.12.1
三次地方史研究会発行

「戦時回覧板」を読む

―地域史料から、戦争の歴史を学ぶ―（その2）

中畑　和彦

・「戦時回覧板」を読む』
―地域史料から、戦争の歴史を学ぶ―（その2）　中畑　和彦
・補記
・【史料紹介】「庄屋日記」　立畑　春夫
・『令和六年度　みよしの歴史を探る』の開催
・二〇二四（令和六）年度総会記念講演
『発掘された「はいづか」を振りかえって』

はじめに

今回は、昭和十六（一九四一）年十二月八日アメリカ合衆国ハワイ真珠湾への攻撃など、日本によって開始された太平洋戦争と、その後、昭和二十年に入り戦局がどのように推移していったのか、その結果八月十五日の終戦（日本の敗戦）に至るまでの連合国側の動きとそれに対して、天皇を初め政府・軍部が本土決戦に備え、国民をどのように戦争に動員していったのかなどについて、最初に大まかに振り返ってみる。

次に戦後、日本政府に代わってＧＨＱ（連合軍総司令部）が統治し占領政策を進めたが、その中で広島への進駐はどのように行われたのか、進駐軍（終戦までは敵国軍であった）が日本国民の前に姿を現し、人々の日常生活にどのような影響を与えたのか（回覧板の中の日本人の「心得」《略称》を記した文書）などから考えてみたい。

また戦後も引き続き行われた「戦死、遺骨の帰還」に関わって、ＧＨＱから出された命令がどのようなものであったか、占領政策の中で何を変えようとしたのか（昭和二十一年七月に出された「勅令三百十一号の実施」に関わる回覧文書などを通して）考えてみたい。ただ、回覧板には終戦前後のものが残っていないので、三良坂を初め三次地域の状況を窺うことが難しい。従って、当時の全国的な資料も参考にしながら考えてみたい。

一、日本の降伏と間接統治

①　戦局推移と御前会議、そして敗戦

昭和二〇（一九四五）年に入って、アメリカ軍による日本本土に対する空襲が日々激しさ増す状況になり、国民に課せられたのは本土決戦に備えての準備であった。当時は厳しい報道管制の下、国民には真実が知らされていなかった①。戦後明らかになったように戦局が大きく変わっていたのである。その起点となったのが、昭和十七（一九四二）年六月五～七日のミッドウエー海戦において日本海軍がアメリカ軍に敗北を喫したこと。それに続き昭和十八年二月にはガダルカナル島撤退、五月アッツ島守備隊の全滅、さらに十九年六月マリアナ沖海戦、七月のサイパン島での日本軍全滅…と敗戦が続き、その時点で勝敗はほぼ決していた。二〇年に入り四月、アメリカ軍による沖縄本島上陸、六月には同島における日本守備隊全滅、沖縄住民十万人の犠牲を払い占領という状況に到ったのである②。

そのような事態の中、天皇は六月二十二日に御前会議を開き、「戦争終結」への動きを始めた。

だがここでも戦争継続の方針は変わらず、翌二十三日に議会で決定したのが「義勇兵役法」と「戦時緊急措置法」である。そこに一縷（いちる）の望みを託したとは言え、今日から言えば、国土を破壊尽くし、国民に多大な犠牲をもたらしただけの無謀な企みであり、それを下した責任は改めて言うまでもなく重いと言えるだろう。

そして敗戦を迎えたのである。その決定的な要因となったのが、アメリカ軍による広島、長崎への原爆投下であった。

広島への原爆被害状況については『広島県史・原爆資料編』、『広島県戦災史』などに詳しく書かれているが、三次地方との関係については『三次市史Ⅲ』の「三次と原爆」P.313～319に書かれているので参照していただきたい。前号でも取り上げたが、三良坂町を初め三次市、双三郡内の各町村から、軍関係を初め、仕事や学業の関係等で広島に出ていて被爆された人も多数いた。当時はそのような人々も含め、広島市内から多くの被爆者が罹災列車によって三次へ運ばれて来たのである。前号の中で紹介した三次市川西村（現、川西町）在住で終戦の時、旧制中学二年生（十四歳、現在の三次高校生）であった中宗 寛氏（以下、「中宗氏」と